

こすもす便り 第3号 (2017年1月)

◇保護者の皆さまへのお知らせ紙です◇

ご挨拶

★土曜日の午後の外出から

12月から、毎週土曜日の午後は外に出かけています。12月3日は平和台公園のアスレチック広場でした。家から野球道具やサッカーボール、そりなどを用意してきた子ども達は、やる気満々で出かけました。フェイスブックの写真でも紹介しましたが、子ども達のはつらつとした動きには、非日常を楽しむ心が踊っているように見えます。野球場の広さに驚き、ピッチャーマウンドからバッターまでの距離の遠さに『プロ野球ってすごいんだねー』と感心しきり。いつもの室内の野球の遊びにも変化がみられるかもしれません。

12月10日は電車で青島に行きました。電車は片道20分の距離。電車内は結構混んでいて立っていましたが、徐々に降車する人がいると、空いた席を見つけて落ち着いて座っていました。そのうち周囲に興味向き、座ったまま目で探索です。何を見つけたのでしょうか。

青島は2度目だったため今回は植物園にも行きました。前回と同様にみんな砂浜での貝拾いに夢中で「宝贝」なるものを持ち帰って、後日きれいに拭き上げ大切に保管し、時々出しては愛おしそうに丁寧に扱っています。共同制作の材料になりそうです。

12月17日は、お出かけ先を子ども達と相談して市民の森公園に決めました。サイクリングや池の鯉と戯れることで十分満喫したのか持参したボールに出番はありませんでした。自然の魅力には勝てませんね。これからも土曜日の午後の外出先での様々なアクシデントや出会いの数ほど子ども達の新たな一面と出会えることが楽しみです。

★初めてのクッキング

12月24日は、2グループに分かれてケーキ作りに挑戦しました。2人のチームは話し合いながら市販のスポンジに生クリームを全体にのぼし周囲にクラッカーを貼り付け、上の面にはクリームのお花が敷き詰められ、そこにチョコレートペンで思い思いのデザインを描き、グミやミックスカラーでカラフルにトッピングするとクリスマス仕様のデコレーションの出来上がりです。べつのグループが生クリームで描いたのは顔でした。トッピングも可愛らしく独特のケーキが完成しました。みんなそれぞれに喜んで参加し、協力し合っていました。出来上がったケーキとシャンパンで乾杯！素敵なクリスマスパーティーになりました。プレゼントは、知り合いから寄贈された雑誌の付録でしたが最新号のためか子どもたちには好評で「これが一番嬉しい」との正直な感想にちょっと複雑。でも全てに喜んでもらえて私たちも大満足でした。

12月29日は今年最後の活動日。1年の締めくくりに、お好み焼きパーティーで盛り上がりました。粉と水、そして卵を混ぜて、海鮮と切ったキャベツを加え、ホットプレートで表面がぽつぽつとへこみが出来れば豚肉を広げて乗せて裏返します。思いの外(?)上手に出来ましたよ。焼けた面にたっぷりのソースをへらで伸ばし、青のり、鰹節をのせて最後にマヨネーズで仕上げました。裏返すとき以外はほとんどの行程を子ども達だけで行い、見た目も味も大満足でした。みんな驚くほどたくさん食べてくれて、早速次のリクエストに「たこ焼き」があがっています。お楽しみに!

★12月の活動

アートプログラムAはこれまで制作した折り紙や造形品を一つの作品としてまとめてみようという取り組みです。今回はクリスマスツリーに見立てた飾り付けを行いました。

子どもたちの全員参加できるように、日程を工夫しながら数回に分けて貼り付けていきました。初めはのりが手につくのが気になって敬遠がちだった子どもも、楽しい雰囲気誘われるように気がつけば折り紙にしっかりとのり付けをするその顔は心なしか誇らしげに見えました。何でもないことのように思われますが、その子にとっては苦手な感触を受け入れるには大変な勇気と努力が必要なのです。仲間の笑い声に誘われ、職員の声援と見守りと賞賛が後押しとなって、自ら2枚3枚と折り紙を選びながら挑戦していき最後は満足そうな笑顔で『え!もう終わり?』。きっとこの経験は大きな自信となったに違いありません。

アートプログラムBは様々な手法を使ってクジャクの絵を完成させました。自分達で自然にそれぞれのテリトリーをきめていき、絵の具で好きなものを描いていきました。

前回の絵の上に吹き絵で絵の具を重ね、隙間にも模様を描いていきました。次の回では、野菜の切り口を使った版画で、ほとんどの隙間は埋まっていきました。

最後は手形です。自分たちで決めたテリトリーを越えて、全体に描かれていくアートは狭い空間がとてつもなく広い劇場のように変わっていきました。それぞれの手法にも、苦手な感覚はありましたが、全員が参加して完成しました。もう誰がどこに描いたのか見分けがつかないのかと思われましたが、自分の描いた処はしっかりと確認しています。

苦手なことを『得意になれ』という必要はないのです。生活の中で苦手な手が出せないようなことがあって、そのたびに苦しんだりしないように『嫌ではなくなる』程度に慣れることでいいのです。もちろんその先の可能性も楽しみながら・・・子どもの脳は可塑性があるため、苦手なことでも少しずつ無理なく慣れていけるようです。例えば子ども同士で手を繋ぐことが苦手なAさん。毎日の遊びの中で、大好きな遊びの前に手を繋いで挨拶をする場面があります。一瞬だけ繋ぐことが出来ると、すかさず職員は褒めます。なぜなら、苦手ながら挑戦する努力に対する惜しみない賞賛は当然で、良く出来たときや上手くいったときに褒めて共感することと同じです。他の人から見れば、ただ手を繋いだだけに見えますが、本人の見えない努力は想像以上なので心からの賞賛が必要なのです。そうして繰り返していくうちに嫌ではなくなるまでには慣れてきます。だからといって得意になるわけではなく、積極的に手を繋ぐことはほとんどありませんが、必要なときは繋ぐことが出来る程度に『嫌ではなくなる』ので、生活力の一つになります。

私たちは『嫌ではない』ことを『普通』として生活しています。そしてそれは生活の大部分を占めているのです。